

子どもの居場所の意義と社会背景－機能主義世界の拡大とやせ細る放課後の成育環境－

萩原建次郎（駒澤大学）

1. 子どもの居場所に関する現状と社会背景

(1) 子ども・若者が経験する日常世界と居場所

事例1（小学生）

私が小学生の頃は家の近くに親戚も住んでいたことに加え、向かいの家には長い付き合いのあるご近所さんも住んでいた。家族全員が外出中で家の鍵がなく家に入れない場合は、近所の家に居座っていたこともあった。お茶やお菓子が提供され、安心感のある居場所であった。

しかし、土地の買収や引っ越しが相次ぎ、今では近所の親戚も向かいのご近所さんもいない。今は大学生になったので、そのような居場所は必要なくなった。しかし、現代を生きる子どもたちはそのような居場所はあるのだろうか。

私が働く塾で何人かの生徒に聞いてみたところ、多くがそのような居場所は無いと答えた。家の鍵を当たり前に持ち歩き、親は共働きのケースである。当然、家に一人でいるということは多いという。しかし、彼らはそれが当然であり、インターネットという誰かと繋がれる居場所にいることで寂しさを感じないというのだ*。（※：事例6－1，6－2へ）

私の弟は不登校ではないが、前述のような居場所を体験したことがないため、近所に住んでいる人の名前などを全く知らない。何か困ったことが発生した場合、おそらく誰を頼ればいいのかも分からず混乱してしまうだろう。

事例2（小学生）

小学生の頃、私は毎日のように放課後は野球をやっていた。場所は住宅密集地に無理矢理作ったような小さな公園であった。ある日、野球をしていると、ボールが民家の敷地内に入ってしまった。それまでは、近所の人も多めに見てくれていたが、さすがに限界にきたのか、「もうここで野球はするな」というお叱りをもらってしまった。

その日以来、その公園では実質野球ができなくなってしまった。しばらくして町内会も動き、花壇を作ったり、立札を立てることで、一層遊びにくくなってしまった。

結果的に、私の居場所はなくなったに等しかった。学校の校庭では、野球どころか球技全てが禁止、他の公園や広場は近くにはなく、心にスッポリと穴があいてしまった気分だった。

事例3（中学生）

自転車で通りを走る時、歩道を走ると、歩行者から邪魔者扱いの視線が注がれる。かといって車道を走ると自動車から遠慮なくクラクションが鳴らされる。その時僕はいつもこの自転車の置かれた状況は、中学生の時期に似ていると考えたりする。

中学生には地域に遊び場という場はなかった。もちろんバイトもできないから金もないし、公園では小学生の保護者から冷たい視線。まるで違法駐輪の自転車のように、どこにも止める場所のない自転車のように、学校と家の間の社会に僕の居場所はなかった。それでも中学生には自転車しか乗る物がなかった。

(2)機能性・経済効率重視の都市化の進行と地域における安心・安全の居場所の喪失(事例1～事例3)

- ① 顔の見える安心・安定した近所づきあい（地域コミュニティ）が、機能性・経済効率重視の都市開発と経済のグローバル化に伴う住民の流動化のあおりを受けて解体・衰弱してきたこと。
 - ② それは人々が身近な安定した共同体（地域・家庭・職場など）を失って孤立し、濃密な関わり合いを失ってきたことを意味する。同時に不特定多数の他者と関わらざるをえなくなった。
 - ③ 身近な安定した共同体で共有されてきた時間と空間と人間関係（仲間）はバラバラに切り離され、あたかも時間・空間・人間関係が個々人の所有物、選択肢へと変容した。
- cf.三間（サンマ）の減少として 1970 年代から顕在化し、90 年代以降に加速した。

このような都市化と社会の流動化は子どもの成育環境に大きな負荷をかけ、副作用として以下のような複合的症状を生み出している。

- i) 子育て家庭・親の孤立化
- ii) 子どもと大人の軋轢
- iii) 子どもの外遊びの環境破壊
- iv) メディア空間への引き込み

(3) 子育て家庭の孤立⇔子どもと大人の軋轢

家庭・学校・地域・職場などの共同体における身近な他者との関係が切り離されるということは、時間をかけて信頼関係を築くこと、互いのすれ違いを修正するゆとり、それぞれの経験の履歴を共有することもできなくなるということを意味する。

地元で生まれ育ち、そこで子育てをするわけではない親が増えることは、親自身にとっても、身近に事情を知る他者がほとんどいないことを意味する。それは精神的にも孤立した子育てになる。

このような親同士の関係の希薄化や世代間の分離・断絶は、子どもたちにとっても日常世界が顔の見える信頼関係に根差す安心安全の場ではなくなることを意味する。それゆえ、事例2、事例3、事例6－1のように子どもと他世代間でも軋轢が生じやすくなると同時に、子どもたちの地域の居場所は極めて限定されていく結果を招かざるを得なくなる。

事例4

中学生の時、不良と呼ばれてしまう友達が話していた言葉を思い出した。「別に何をするわけでもないのに、どこにいてもなんでここにおると白い目で見られている気がする」。

派手な服装をし、学校をさぼってうろついている彼らの中にあっただのは、そのような居場所のなさであったのだろうか。そしてその言葉を聞いた当時の私が、その言葉に驚くのではなく、共感していたことも思いだした。

制服に包まれている限り、昼間いることを許される場所は学校しかないし、放課後もいることを許される場所は限られている。クラブ活動、塾、習い事、それ以外の場所にいる時は明確な理由が必要で、だから私たちは学校に、塾に、クラブ活動に、必死に居場所を求めているのだろう。

事例5

夏休みや冬休みなどの長期休暇は子どもたちに虚しさを与えることがある。友達と会う機会も減り、親が共働きなら尚更孤独を感じるだろう。そんな中、地域コミュニティの行事が開催されれば、同級生や近

所の人に会うことができる。

私が小学生の時は、毎月子ども会がその月に関連したイベントを開催してくれた。8月には夏祭りや12月にはクリスマス会が開催された。その期間は夏休みと冬休みであり、友だちに会える機会として毎年ワクワクしていたのを今でも覚えている。

しかし、少子化が原因で資金面での課題があり、今では規模がかなり縮小されてしまった。また、夏は暑く、時間までも縮小されてしまった。このままでは子どもたちはますます自宅にひきこもり、虚しさを抱え込むことになるのではないだろうか。

→長期休みに子ども同士で自由に遊ぶことが今や自明ではない。塾・習い事・家族行事・電子ゲーム中心の室内一人遊びなど、子どもを取り巻く時間・空間の個別化が進行し、人間関係は継続的安定的ではなくなった。そのため、誰かと対面的に共有する居場所がない中での長期休みやコロナ禍でのステイホームは、子ども・若者に精神的な孤独と孤立を強いる状況を生み出しやすい。

(4) 子どもの外遊びの環境破壊⇔メディア空間への引き込み

事例6-1

私が中学生の頃、小学生の時によく遊んでいた公園で遊ぼうと、友だちと鬼ごっこをしたり、ブランコに乗っていた。すると、近所に住む大人から「どうして中学生なのに公園の遊具で遊んでいるんだ」と言われたり、「うちの子が遊具を自由に使えなくて困っている」、「中学生は公園に来ないで他の所に行きな」などと厳しい意見を言われたことが何度もある。

当時の私は、去年まで毎日のように友達と公園で遊んでいたのにどうしてダメなのか。他に遊ぶところが無いのにどこに行けばいいのか、とずっともやもやした感情を持っていた。

私の住んでいる地域には公園以外に身体を動かせる広い空間がなく、お金を使って居場所を確保するという考えもなかったため、自分の家以外には他に友だちの家かコンビニの飲食スペースなどしか放課後遊べる場所が無かった。

事例6-2

その結果、外に出てもいる場所は無い、友達と遊ぶ場所も無い、家でおとなしくゲームをしようという考えに行きつき、友達と直接会わずとも遊べるオンラインゲームやSNSの楽しさを覚え、家から出るのが面倒くさいという思考になってしまった。

このような現象に陥るのは私だけではなく、引きこもりの子どもたちの多くはこの考えを持っていると思う。そして、人とコミュニケーションを取る機会の減少やコミュニケーション能力が育たないことによる低下、衰退の大きな要因の一つだと感じている。

過去の私のように、現在の中学生も居場所が無くて困っている子たちは多く思う。中学生は小学生のようにはっきりと子どもと言える年齢より少し大人で、逆に大人が利用するような施設に行くと、こは子どもがいるような場所じゃないと言われ追い出される。

→今や SNS やインターネットは、時間・空間・人間関係が個別化した子ども(大人も同様)をつなぎとめる必須アイテムとなっている。それらが一時的に「寂しさ」をまぎらわしたとしても、根底にある社会的な孤立と隔絶感・孤独感は、確実に世代を超えて浸透している。cf.萩原「都市における子ども・若者の社会的孤立と居場所・つながりへの支援」『都市研究 vol.15』せたがや自治政策研究所、2024年

事例 7

2019 年から感染拡大した新型コロナウイルスによって学校も休校を余儀なくされ、当時私も高校入学してすぐであったが、学校に通えず先生や友人に会うことができず、オンライン上のみでしか家族以外と話す機会がなかった。環境が大きく変わったこともあるが、人と対面で話すことができない時期は気分が非常に落ち込んだことを覚えている。休校が明けた後もなかなか学校に通えなくなってしまった友人も見かけたことから、対面でのコミュニケーションを取ることの重要性を実感している。

2. 機能主義世界が生み出す中高生年代の生きづらさと居場所のなさ

機能主義の都市型思考や都市空間は、子どもでもない大人でもない、中間的で境界的な存在としての中高生に対して、生きづらさや居場所のなさを生み出しやすい。区の子どもの権利条例に照らせば、事例 3 や事例 4、事例 6－1 にあるように、中高生の放課後の遊び環境において 第 9 条 (10)「子どもであることを理由に不当なあつかいを受けないこと」や、(5)「学び、休み、および遊ぶこと。そのために必要な環境が整えられること」に抵触する事態を生んでいる。子どもの権利に対する侵害といえる状況への把握が必要である。

事例 8

中高生は家庭環境や受験勉強で影響を受けやすい。そのため、居場所であるはずの家と学校という 2 つが居場所ではなくなってしまうことが危険である。

私が中高生の時に立ち寄れる場所がなく、逃げ場がないと感じたことが多々あった。部活動が始まり、強制的に人間関係を築かなければならない場や、定期テストで順位付けられた明確に比較される体験が始まる中学校は、小学校と比べ居心地の悪いものへと変化した。また、家では両親がおり、反抗期が始まるため、以前のように家が一番心の落ち着ける場所ではなくなってしまった。

このように居場所が変化していく中で、友人や上下関係を重視していない異年齢の学生と話ができる場が自分にとって必要であったと考える。もし、あの時に学校とは別の交友関係があれば、相談や気晴らしなどをすることができ、落ち込むことが少なかったのではないかと考える。

→機能主義は目的志向・効率志向を基本とし、時間・空間・人間関係を目的別・機能別に分割する方向でこの世界を管理する。そこでは<あいまいさ><余白・あそび・すき間><場所の固有性><身体性>は極力排除される。

しかし、これまでの事例からも明らかなように、子どもの立場からすると、機能主義から排除されているそれらの要素は、いずれも居場所には欠かせないものである。

居場所は人間関係における遊びや冗長性、空間における居方・使い方・過ごし方の自由さ、子ども自らが安心して住み込んでいける、作り変えることができる余白やすき間、十全に遊び休息できるだけの時間的・心理的ゆとりがあってこそ成立する。それは子どもたちが自由と幸福を享受する、生きる上で欠いてはならない場であり、身近で大切な社会参加・参画体験の場でもある。

放課後に遊びや余暇などを通じて自分たちのルールを決めたり、場の在り方に反映させたり、互いの意見や思いの違いを調整したりといった経験は、遊ぶ権利、休む権利、意見参加の権利の内実となり、子どもの発達を支える人間形成の基盤である。それゆえ学校でも家でもない第三の場、同級生でもない多様な他者とも安心して直接ふれあい、先生でも親でもない第三の大人や異世代に相談できる<場>の社会的保障・整備は重要課題である。